

生存科学研究 ニューズ

VOL. 6, NO. 4, 1991. 7. 10. 発行

発行 財団法人 生存科学研究所

〒104 東京都中央区銀座4-5-1

聖書館ビル 303

電話 03-3563-3518

第5回医薬問題研究会 未来社会の医薬の位置づけ

5月14日(火)午後3時より5時迄、研究所会議室において医薬問題研究会が開催された。今回は平成3年度の第1回会合で、粕谷委員長は冒頭この委員会について、従来を踏襲しながら広い視野から、医薬開発における確かな医学的評価に的を絞り、社会的評価と結合できるような土台作りを行うことを目的とする、と挨拶。こうしたシステムを開発することで世界的な貢献もできるであろう。その国の医薬のレベルは国民の正しい理解の有無で変わるので、これに関する教育も必要である、と述べた。今年度の研究会メンバーは、これまでの方他に、協和発酵工業株式会社取締役副社長中野徹雄氏が新たに加わっている。

今回の発表者は実験動物中央研究所附属前臨床医学研究所所長柳田知司委員で、「未来社会の医薬の位置づけ」と題し、(1)最近の医薬開発動向、(2)医薬の進歩に影響を及ぼす要因、(3)科学技術の進歩による影響、(4)今後の医療に必要性が高いと考えられる薬物、(5)今後予想される医薬に対する社会の態度、(6)未来社会における医薬の動向について、と順次広範な問題を整理しながらユニークな意見を発表された。その

後出席者をまじえ活発な討論が行われた。

次回は7月8日(月)午後3時より5時まで。発表者は上智大学生命科学研究所所長青木清委員で、「生命科学の立場より」と題して。

第5回家庭問題研究会 家庭を単位とした健康論

5月21日(火)午後6時より8時迄、平成3年度第1回家庭問題研究会が開催された。今回は国立環境研究所(旧国立公害研究所)小泉明所長が表記のテーマで発表。

家庭問題研究会は平成2年度に引き続き、同一研究会名で、同一メンバーで行われる。

小泉所長は、公衆衛生学教授時代の健康評価、健康指標の研究に際し、「健康概念」に突き当たり、その研究に取り組んだことを振り返りながら、健康は主観的でなければならず、自己実現こそ健康の要件であると考えようになったと説明。同じことは家庭の健康についても言え、例えば病人が居ても、それへの対応のあり方で健康であるかどうかが決まると指摘した。

発表後の討論では、先ず自己実現のあり方を巡って健康概念が具体的に討議され、必要により動機付けられた自己実現と発達により動機付けられた自己実現とがあるが、両方を備えるのが本当であろうとされた。次いで漢

方における健康に話題が移り、東洋では「養生」がそれに当たるであろうが、それは環境の利用を制限するセルフコントロールであり、西洋の自己実現とどう対応するかに関心が集まった。

この討議をふまえ、次回は7月31日(水)午後6時より、東洋と西洋の「養生」に関して、発表者は江川委員と小玉委員の予定。

第2回環境・保健・産業問題研究会
鉄鋼業における環境問題の
取り組みと課題

6月27日(木)午後2時より4時迄、第2回環境・保健・産業問題研究会が開催され、新日鉄の家永順二氏が表記のテーマで発表し、以下のように述べられた。

* * * *

環境問題には、地域環境問題、排泄物・資源リサイクルの問題、地球環境問題とがありそれぞれが重複しているが、地球温暖化問題からアプローチする。

鉄鋼は現在世界で年間約8億トン生産され、日本の生産は1億8千万トンである。鉄の製造には石炭使用が不可欠で、省エネが必要である。第1次石油ショック以来既にやっており、石油を石炭に変えてきたが、炭酸ガスの発生は増えている。これ以上の省エネは無理で、新しい技術の開発が必要である。

これからは採算の取れない省エネ対策への投資も必要になるかもしれない。鉄製品の改善による省エネ効果も期待できる。合理化のために生産集約が必要であるが、これまでの地域環境バランスが崩れかけている。地域も都市化で変化し、住民の意識も変わっている。これまでの対応だけでは済まなくなるであろう。従業員の健康管理も重要だが、地域環境と職場環境とは切り放せない。今迄問題にならなかった物質がこれから問題になることもあるかもしれない。事前に対応ができるようにしておかなければならない。

* * * *

以上を豊富なデータと、溶融還元製鉄法や半凝固加工プロセス等の技術開発や技術移転にも触れながら、省エネ対策の推進について具体的に述べられた。

討議では、企業共同での技術開発や対策研究と独禁法との関係、環境基準、健康影響等の認識の国際的同一化の必要性、マテリアルバランスの重要性等が議論された。

次回は8月12日(月)午後2時より。

公益信託武見記念生存科学研究基金
平成3年度第1回運営委員会

5月31日(金)午後3時より、平成3年度第1回基金運営委員会が開催され、平成2年度の事業報告・収支決算が審議され、全員一致で承認された。平成2年度は、生存科学研究会のほか第1回「生存科学シンポジウム」を財団と共催し、研究誌『生存科学』の出版も財団と共同して行った。また武見奨励賞の授与のほか武見国際保健講座の武見フェローへの助成も行っている。

次いで副運営委員長2名の増員が協議され、不破敬一郎委員、江見康一委員の両名が新に副運営委員長に選ばれ、副運営委員長はこれまでの土屋、山口両氏に加え4名となった。これはニユース前号で紹介した各種の自主研究を含む平成3年度の新たな研究展開に備えたものである。

第3議題として、平成3年度の表彰助成委員会が編成された。今年度は武見記念賞授賞の年であるので、この委員会は武見記念賞選考委員会となる。

表彰助成委員会委員は以下のとおり。

(敬称略)

*山口正民	青木 清	梅園 忠
江見康一	小平 敦	鈴木雪夫
田村貞雄	筑井甚吉	土屋健三郎
豊川裕之	中尾喜久	中山昌作
不破敬一郎	藤川正信	藤野志朗
師岡孝次		(*印は委員長)

ハーバード大学武見講座活動報告

報告者 津谷フェロー

- 4/1 The Violence Prevention Project
/ D.Prothrow-Stith
- 4/8 Transition from a Clinical to
a Public Health Model to Treat
Child Malnutrition in
Massachusetts / K.Peterson
- 4/15 Training Health Workers
/ C.H.Wood
- 4/22 Air Pollution and Health Effects
on Children in Mexico / D.Gold
- 4/29 The World Bank and the Health
Sector in Sub-Saharan Africa -
Suggested Issues for Discussion
/ R.Vaurs
- 5/13 The American Public and the
Emerging Debate Over Performing
Our Health care System
/ R.Blendon

第5回武見国際シンポジウム
実行委員会 第1回会合

6月20日(木)午後12時30分より、
第5回武見国際シンポジウム実行委員会が開
催され、シンポジウムにむけて準備が進めら
れた。

シンポジウムのテーマは、ニュース前号で
も紹介したように「健康開発にかかわる倫理
的諸問題」で、現在のところ平成4年7月
15日(水)、16日(木)ならびに18日
(土)の3日間の予定。

15、16の両日はクロースドとし、第1
回からの世界各国の全武見フェローに呼び掛
けて、フェローからの発表を中心とする予定
で、実行委員会は主としてこの計画・実行に
当たる。

一方、7月18日(土)はオープン・シン
ポジウムとして東京で開催し、特別講演と、
クロースド・シンポの報告と討議が行われる
予定で、会員はじめ多くの方に参加してい
ただける。こちらは組織委員会が直接計画し
実行委員会がその実行を手伝う。

実行委員会のメンバーは、青木常務理事と
日本の武見フェロー全員とからなるこれまで
の準備委員会に新たに2名の常務理事が加
わったもので、以下のとおり。(敬称略)

**青木 清	*丸井英二
田中慶司	藤井 充
大前和幸	上原鳴夫
小林麻毅	津谷喜一郎
門司和彦	中山昌作
田村貞雄	

(**印は委員長 *は委員長補佐)

なお組織委員会のメンバーは以下のとおり。
(敬称略)

*小平 敦	青木 清	開原成允
粕谷 豊	田村貞雄	筑井甚吉
土屋健三郎	豊川裕之	中山昌作
藤野志朗		(*印は委員長)

北上プロジェクト準備会
岩手県 安家・沢内村を訪問

平成2年度から準備を始めた生存科学研究
所北上プロジェクト準備会は、6月29日
(土)、30日(日)、7月1日(月)の3
日間にわたり、小平専務理事はじめ梅園、
草野、斉木、佐々木、中山、溝田、師岡等の

メンバーで岩手県下閉伊郡岩泉町安家と同県和賀郡沢内村を訪問し、同地を見学、地域のリーダー達とそれぞれの地域の将来を考える会を開催した。

なお一行には嘗ての筑波大学北上プロジェクトのメンバーから筑波大学の川喜田元教授と糸賀教授も参加。また自治医科大学の協力により岩泉町の済生会岩泉病院柴野院長が安家での会議に参加。生存研のメンバーであり、沢内村村立病院の初代院長でもある仙台市立看護専門学校加藤校長が沢内での会議に参加している。

沢内村は奥羽山系の北上川流域にある有名な豪雪地帯で、約30年前、生存研の創設者である武見太郎博士が保健・医療の指導に当たられたところであり、また筑波大学北上プロジェクトが10数年にわたり環境・文化・生活等に関する調査をしたところである。

沢内村が豪雪地とはいえ開けた田畑を有して現在は豊かな農業を営んでいるのに反し、安家は北上山系の山間にある集落で、迫った山と谷の間を縫う細い道路の脇にある、少数の民家と僅かな畑のほかは山ばかりという所である。

安家も筑波大学北上プロジェクトが調査を10年以上にわたり行ったところであり、今回は生存研のメンバーでもあり筑波大学北上プロジェクトのメンバーでもあった神戸芸術工科大学斉木助教授の案内で、僅か3日の間に、かなり離れた両地を効果的に訪問することができた。

今回はまだ準備会の段階ではあるが、この訪問により安家・沢内両地域の比較ができることにより、より明確に、それぞれの環境・生活の特色やそこで抱える問題の概要を掴むことができ、両地区を拠りどころとする北上川流域、奥羽・北上両山系全般の生存問題の調査の取り掛りの糸口が見えてきた。

豊かな自然と素朴な生活に生存の原点を見る安家と、そういう環境・生活を基盤に、よりよい生存を目指し、共同して将来を開拓してきた人間活動のあり方を見せる沢内村。

この二つのモデルを拠りどころに、さらに広域的な取組による、実態の調査と地域が抱える問題解決への研究を進めることは、両地域への貢献ばかりではなく、他地域の農山村、都会、日本、そして世界の生存に大きなヒントを与えることができるはずである。

九州プロジェクト準備のため 大分市を訪問

平成2年度から準備に入った北上プロジェクトに続いて、今年度は九州プロジェクトも準備が開始された。そのため6月16日（日）小平専務と常務理事2名が大分を訪問、地元在住の吉川理事等と懇談した。

九州は安家と同様、生存の原点を残した地域もあり、同時に近代的な重工業を抱え、日本近代化を先導した地域であるという点で、北上プロジェクトとは類似しながらも対称的な生存モデルとして重要な研究対象である。

また、沢内村が村立病院と村全体の努力で狭いながらも地域の保健・医療を包括的に・緻密に推進している地域であるのに対し、九州は医師会病院を数多くもつという特色に見るように、地域のプロフェッション達と住民達との共同活動による多数地域における保健・医療推進の広域的なモデルとなる地域であり、この点からも多くの共通点と対称的な部分をもち、研究対象としての意義の深さがあるかがわれ、今後の研究の進展が期待される。